Education first !!

久留米大学医学部 医学教育研究センター

Center for the Study of Medical Education (CSME)

久留米大学医学部医学教育研究センター　ニュースレター　第33号　　2019 年 11月発行

医学教育分野別評価

2019年10月28日から11月1日までの1週間、医学教育分野別評価（現地調査）を受審しました。多くの教職員の協力もあり、無事に受審を終えることができました。この受審と準備（自己点検）を通して、本学の良い点、悪い点、様々な課題が分かりました。また評価委員からも、改善すべき点として31の項目を指摘されました。久留米大学医学部医学科をより良くするために、今後はこの指摘された点を改善し充足するだけでなく、引き続き自己点検を行い、内部からの質向上と、本学の教育環境について常に見直しを行う心構えができたと思います。詳しい内容については、次号にて改めて紹介させていただきます。

医学教育研究センターを楽しむためのヒント

Q：課外活動（ボランティアなど）の紹介はできますか？

A：大歓迎です。紹介記事と写真をお送りください。

Q：サークルの紹介はできますか？

A：内容にもよりますが、歓迎します。紹介記事と写真をお送りください。

医学教育研究センターは教育１号館の６階にあります。大学生活に関すること、学業に関すること、留学やボランティア、部活に関すること。大学に関する悩みがあれば、どんなことでも相談に乗ります。いつでもお越しください。「手薬煉を引いて」お待ちしています。

- スタッフ一同

今月の教員の声と、今日のワンコより

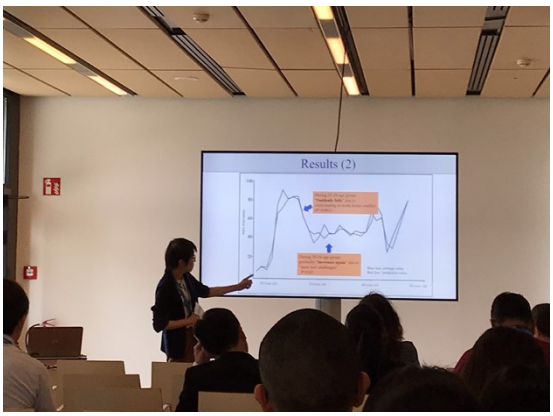
今号の特集

- 今月の教員の声
- 今月の医学時事

今月の教員の声

AMEE 2019 に参加して

守屋 普久子 （病理学講座）



医者になったからには、一度は「Ladies and gentlemen!」の出だしで発表したいと思っていましたが、やっとその願いが叶いました。AMEE2018で発表された熊本大学の後藤理英子先生に「この学会はnon-nativeにも優しいよ。演題を出してみたら？」と励まされ、意を決した演題登録したところ、無事にアクセプトされ、発表にこぎ着けた･･･というわけです。

AMEE（An International Association for Medical Education）2019は、8月24日～28日に、オーストリアのウィーンで開かれました。私の発表はe-posterで、発表3分、質疑応答2分の割り振りです。事前に学会から、「発表は3分でまとめて下さい。3分でできるかどうかはあなたの力量にかかっています」とのアラートが流れてきたので、なおさらナーバスになりました。発表途中でブーっと鳴ったりすると、それだけで緊張感が増すからですね。しかし実際の発表時にタイムキーパーはおらず、モデレーターの裁量で、淡々と進められました。

私は、ママさん医師の「work motivation」に関する研究を発表しました。これは、久留米大学病院の元気プロジェクト委員会（男女共同参画委員会）として平成28年度の厚生労働省女性医師キャリア支援モデル普及推進事業を実施した際に考案した「やる気スイッチグラフ」を、久留米大学病院と佐賀大学病院のママさん医師39名に実施し、久留米大学のバイオ統計センターで解析してもらったものです。

研究結果では、①ママさん医師のmotivation valueの動きは、医学部入学時点から医学部卒業まで順調に上昇し、卒業時点がmaxとなる、②5歳刻みで年齢グループを設定すると、25～30歳未満の年齢グループでは、valueが急激に低下する、③25～30歳未満のグループでvalueを低下させる要因は、「出産や子育て」「仕事と家庭の両立」にある、④30～35歳未満のグループでは、valueは低値ながらも徐々に上昇する、⑤30～35歳未満のグループでvalueを上昇させる要因は「専門医の勉強や取得」であること、がわかりました。これらから、motivation valueの低下は、日本文化の性別役割分担意識に起因すると思われること、motivation valueを上げるには、専門医取得などのnew challengeが重要、と結論づけました。

AMEE －An international Association for Medical Education -

https://amee.org/home

AMEE 2019

https://amee.org/conferences/amee-2019

AMEE 2020

https://amee.org/conferences/amee-2020

質疑応答では、以下の3点を質問されました。

1. （イギリスからの参加者）この現状への日本政府の施策は？（私の答え）短時間勤務制度の普及、保育園の整備、男性の育休取得の法制化など

2. （カナダからの参加者））性別役割分担社会における医師のキャリアアップに関して、発表者は何が一番大切だと思うか？（私の答え）男女ともに意識を変えること、女性は男性に守られるべきもの、男性は女性を守るべきものという意識を変えること

3. （セッションのmoderatorで香港からの参加者）日本の医学部における女子学生の割合は？（私の答え）約30%、「少ないね」という反応でした。

「英語での発表どうだった？」と聞かれるなら、「まあまあだった」と思います。プレゼンコメントの練習は、日本を発つ前はもちろんのこと、飛行機の中、ホテル、学会会場と何度も繰り返し練習しましたが、なかなか練習通りには行きませんでした。しかし今振り返ってみると、重要なのは発表よりも質疑応答だったのではないかと思います。私は質問に答えるだけで精一杯でしたが、質問に答えるだけにとどまらず、「じゃあ、あなたの国ではどうですか？」などと切り返し、参加者とのやり取りが活発にできれば、もっと盛り上がったのに…と残念に思いました。

私の発表セッションのテーマはdiversityでしたが、diversityやCPD（continuous professional development）はAMEEが重要と考えているテーマでした。私の発表も、CPDの一つとして捉えられていました。

発表を終えて帰ろうとしていると、「あのー、すみません」と日本語で声をかけられ、「こんなところでナンパか？」とドキドキしたら（笑）、「男性の育児参加について研究している者ですが･･･」と自己紹介され、同じ路線を歩いている人だと気づきました。あとでこの先生は京都大学の神廣憲記先生とわかり、神廣先生のおかげで、名古屋大学の医学教育の錦織先生ともお知り合いになれました。錦織先生は、社会科学を医学教育の中に取り込む研究をされておられます。

今回の発表は、決して満足のいくものではありませんでしたが、類似した研究をしている研究者たちに会え、今後の研究の励みになりましたし、何よりも「またAMEEで発表したい！」と思えたこと、つまり“新しいチャレンジが、新しいmotivationを生み出す”ことを、自身で体験することができたことが私にとっての一番の成果でした。来年のAMEEは、イギリスのグラスゴーです。また、参加できればと思います。

最後に、海外の学会に快く送り出して下さった、病理学講座の矢野博久教授、消化器内科の鳥村拓司教授、統計解析にご尽力を頂いたバイオ統計センターの角間辰之教授と小原仁先生に、心からお礼を申し上げます。

医学教育研究センター（CSME）

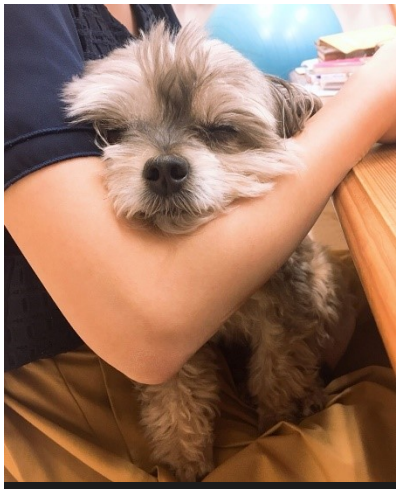
https://csme.kurume-u.ac.jp

クリニカルスキルトレーニングセンター

https://www.kurume-u.ac.jp/site/cstc

今月のワンコ（モモ、マル）

今月のワンコ（コタロー、ゴンタ、モモ）



今月のワンコ（モコちゃん腕枕中）

今月の医学時事

今年も日本人がイグ・ノーベル賞

イグ・ノーベル賞(Ig Nobel Prize)は、人を笑わせて考えさせる業績に贈られます(The Ig Nobel Prizes honor achievements that make people LAUGH, and then THINK)。10月12日の授賞式では、子どもの唾液量を計測した明海大学の渡辺茂教授が化学賞を受賞しました。

受賞の対象になった研究は「5歳児の1日の唾液量の推定」。男児15人(著者の息子を含む)と女児15人を被験者に、安静時の唾液量は坐位で頭を前屈させた状態でつばを出させて計測、食事中の唾液量は6種類の食べ物(ごはんやリンゴ)を5分間咬んで吐かせて計測し、1日の食事時間を調査した結果、5歳児の唾液量は1日あたり500 mLと推定され、成人と同程度であることがわかりました。

論文は2ページの短報(short paper)です(Archives of Oral Biology 1995)。著者はカナダのManitoba大学に留学中、成人の唾液量を計測しており、16人の成人を被験者に同じ方法で唾液量を計測した結果、成人の唾液量は1日あたり570 mLと推定しています(Archives of Oral Biology 1988)。

イグ・ノーベル賞はノーベル賞のパロディですが、人間の知欲(知りたいと思う欲求)や好奇心・研究心(research mind)を知ることができます。今年の医学賞は、「ピザの摂取と病気や死亡のリスク」を調べたイタリア人(Int J Cancer 2003, Eur J Clin Nutr 2004, Eur J Cancer Prev 2006)、経済学賞は「紙幣による細菌感染のリスク」を調べたトルコ人(Antimicrob Rsist Infect Control 2013)です。歴代の受賞者を見ると、RMCP(Research Mind Cultivation Program)の研究課題のヒントになりそうです。

なお、日本人は13年連続で受賞しており、「足の臭いの原因になる化学物質の特定」(医学賞 1992年)、「数百万人分の労働時間を消費した仮想ペット飼育(たまごっち)の発明」(経済学賞 1997年)、「人々が互いに寛容になるカラオケの発明」(平和賞 2004年)、「牛の排泄物から抽出したバニラの香り成分(バニリン)」(化学賞 2007年)、「坐位で行う大腸内視鏡：自らの試行による教訓」(医学教育賞 2018年)などがあります。

文責：安達洋祐

IMPROBABLE RESEARCH

https://www.improbable.com/

第29回 イグノーベル賞

https://www.improbable.com/ig-about/2019-ceremony/

今月のワンコ（モコちゃん）

医学教育研究センターは最先端の技術で学生と教員を繋げます。

編集スタッフより

こんにちは。編集担当の柏木です。第33号です。ついに分野別評価を受審しました。受審週間のスケジュールがあまりにも密でしたので、良く分からないうちに、気が付けば、終わっていたという印象です。今月はワンコ盛沢山です。ニャンコ勢が押されてます。

お問い合わせ先

当ニュースレターついてお気軽にお問い合わせください。 記事も募集しています。

久留米大学医学部 医学教育研究センター 編集担当：柏木 孝仁
〒830-0011 福岡県 久留米市旭町67 TEL: 0942-31-7764 FAX: 0942-31-7765
https://csme.kurume-u.ac.jp E-MAIL: csme@med.kurume-u.ac.jp